



表面は十二支を表現しているようであるが、順不同であり、意味は明らかではない。

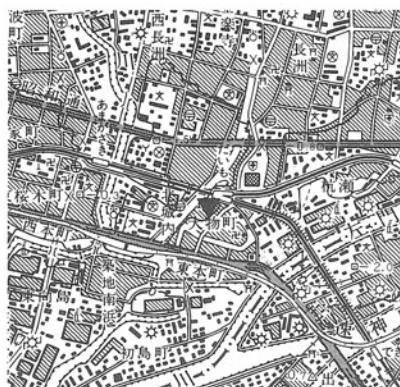
裏面は年号と考えられ、年号で三のつく壬子年は候補として白雉三年（六五二）と宝亀三年（七七二）がある。出土した土器と年号表現の方法から勘案して前者の時期が妥当であろう。

釈説については兵庫県立歴史博物館の小林基伸氏のご教示をいただいた。

（高瀬一嘉）

兵庫・だいもつ大物遺跡

- | | | |
|---|---------------|----------------|
| 1 | 所在地 | 兵庫県尼崎市大物町 |
| 2 | 調査期間 | 一九九五年（平7）四月～八月 |
| 3 | 発掘機関 | 尼崎市教育委員会 |
| 4 | 調査担当者 | 岡田 務・山上真子 |
| 5 | 遺跡の種類 | 遺物包含地 |
| 6 | 遺跡の年代 | 平安時代～江戸時代 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |



（大阪西北部）

調査地は、近世の尼崎城下町の一つである「大物町」の北端に位置する。調査は、市営住宅建て替え工事に先立ち行なわれ、建物予定地のほぼ全面発掘調査を実施した。

調査の結果、建物跡などの明確な遺構は検出することができなかつたが、現在の表土より一・七・三・四mの深さで、中世の包含層を検出した。中世の包含層は、基本的に七層にわける

」とができる、上から①黒灰色粘質土層（耕土）、②黒灰色粘土混じり砂質土層（洪水層）、③灰色砂質土層（耕土）、④黄色砂質土層、⑤黒灰色粘土混じり砂質土層、⑥黄灰色砂質土層、⑦褐色砂利層となっていた。

この層序からみて、当初砂浜であったところに順次洪水などにより砂が堆積し、そのつど遺物も同時に堆積したものと考えられる。

また、水が引いた後には、所々に葦などの植物が繁茂し、植物遺体層として高まりを形成した所もあった。

遺物は、とくに④～⑦層から大量に出土しており（整理用コンテナ約七〇〇箱）、おおむね一二世紀初頭から一二世紀前半にかけてのものと考えられる。

出土した遺物のなかで、最も出土量の多いのが土器類で、土師質

土器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・輸入陶磁器などがある。土師質

土器には、近畿地方で生産されたものほか、瀬戸内海沿岸で生産されたと考えられる椀・杯・皿なども大量に出土しており、古代末から中世初頭にかけて、文献に名のみえる「大物浜」が東西の水上交通の要所であったことを示している。また、とくに注目されるのは白磁・青磁などの輸入陶磁器で、完形品に近いものや底部に墨書きのあるものなどが大量に出土しており、土器の全出土量の数%を占めるものと思われる。おそらく博多から京都へ船で運ばれる輸入陶磁器が、途中で「大物浜」に荷揚げされたことを示すものであろう。

なお、土器のなかには、おおむね底部外面に「おとひぬ」「や、」などの平仮名、「一」「十一」などの数字、判読不能な漢字が記された墨書き土器が含まれている。

遺物は、土器類のほか、土製品・木製品・金属製品・石製品・骨角製品・動植物遺体など数多くあるが、とりわけ一〇〇〇点を超える経石は他に類例をみないものである。

経石は、五×七cm程度の平らな自然石（河原石）が最も多く、経は石の表裏両面のほか、左右の側面・上下面にわたり流麗な楷書でびっしりと書かれている。經典は、書かれた經文から「無量義經」「法華經」「觀音賢經」のいわゆる法華三部經と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「く無量義經」

61×14×2 032

(2) 「く御米□□□」

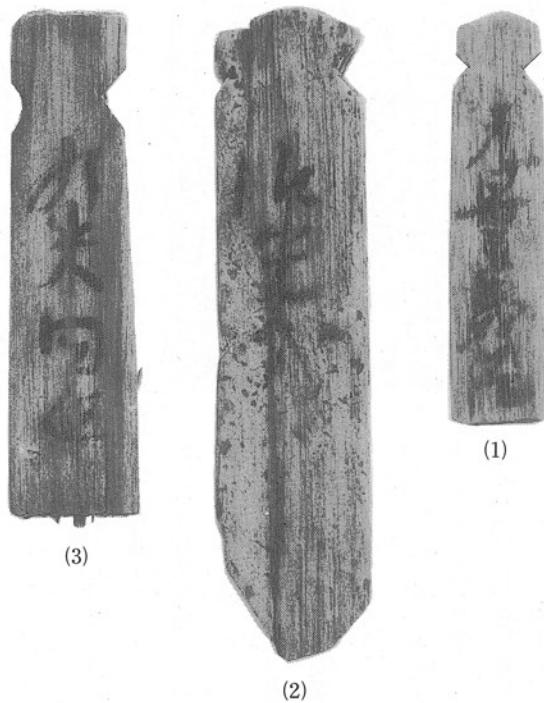
97×22×3 033

(3) 「く能米四□□」

(76)×19×4 039

(1)は、調査区東端の植物遺体層の上層から中層にかけて、土器類などとともに検出されたおびただしい数の経石群のなかから出土した。時期的には、同層から出土した土器などからみて一二世紀前半頃のものと思われる。木箱ないしは袋に入れられた「無量義經」の

1996年出土の木簡



経石を示す付札のようなものと考えられる。

(2)(3)は、調査区東端の⑥黄灰色砂質土層から出土した。時期的には、同層から出土した土器などからみて、一二世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。

(2)は、四字目は判読不能であるが、俵・石・升などの数量の可能

(3)は、四字目は「俵」のようにみえるが判読不能。

(2)(3)は、物品名（米）と数量が記されており、地方から莊園領主などのもとに運ぶ税に付けられた荷札と思われる。遺跡の調査では、出土した遺物にのみ目を奪われがちであるが、「大物浜」に荷揚げされた物品のなかでも、米などの穀物が最も重要なものであったと考えられる。

（岡田 務）